

苦心を遊ばされたのである、あせ苦心遊ばされたかと云ふと、衆生の根生が不同である爲である。利根の者は良いけれども、頓根の爲に、直ぐに深理の妙法を説くと云ふ事は出来まい、説いて衆生が悟らなければ、何にもならん、依て色々と苦心遊ばし、法華經を聞くに堪える様に、四十二年と云ふ永い間、種々の經を御説き遊ばされた、そして最後に法華經を、八年の間に御説き下された。法華經を説かれる前に、無量義經に於て、爾前四十餘年の經文は、皆眞實でない、權方便の經論であると云ふ事を、御説き遊ばされてある、此の文を以て見ても、吾々の依經とすべきは、法華經を除いて、他にない事が分るのであらう、法華經と云へば、八卷二十八品であるが、之れを便宜上假りに二分する事が出来る、前半を迹門と云ひ、後半を本門と云ふ、前半の主とあるのは、何かといふと方便品、之れを主として二十八品を見るのを、唯迹の法花と云ひ、後半の主とあるべきは、壽量品である。之れを主として見た、二十八品、之れ

を唯本の法花と云ふ、同じ二十八品であつて、主とする者が前半にあるが、後半にあるかの相違のみではあるが、其れに天地の相違がある、前半は水にうつる月の如く、後半は天に輝く明月の如く又前者は昨年の暦の如く、後者は今年の暦の如くである、故に吾人は唯本一部の法華經に依憑しなければならん。法華經の肝心は、題目五字である。故に吾人は但信口唱しなければならん、其の功德は妙にして不思議である、但信の一字あるのみ、譬へば小兒の乳を含んで其の味を知らざれども、成長する如く、妙藥を服すれば、自然に病の治するが如く、その藥の何者あるかを尋ねる必要はない。四信五品鈔(二五七)の但信口唱こそ、眞の不思議の妙法に入るべき直路である。

吾人は奈何に生くべき歟

森 亮 遠

一、思想と實生活 吾等は、心の奥で常も佛陀

を慕ひ、無上道を求めて居る。けれども其れが一つとして實生活に表はされた例しがない。のみならず時々の衝動に驅られてはごんち事でもせん限りは無い。この矛盾がいかに吾人の内心を苦痛に導くであらうか。吾等の如き生活にある者は、公然これを發表する事が能さずに悟り切つた様な言行を強ひられるそれだけに苦痛も大きいのである。

こうした矛盾の原因は様々であらうが自己の『力』の不足といふ事が重なるものではなからうか。吾等には何の力もない、周圍に抵抗するの力も無いれば、社會に逆行するだけの力も無い。他人の毀譽を顧み、社會の褒貶を慮つて左眊右顧するより他に何等自己の地歩なるものを發見する事が能きまい、只常に其の折々の境遇に従ふて轉輾するに過ぎまい、之れが無力な吾人の生活である。若しも吾等から、此の周圍の予係あるものを除いたあらば、それこそ跡には憐れな、無自覺な生存欲より外に、何の痕跡をも認むる事が能きなからう。あゝ僅に生欲によりて存續せる吾人。そは彼の雨

露を待ちつゝ咲きのこる屋上の草にも等しい運命では無からうか。自覺！大なる自覺をせねばならぬ。吾人はこの自覺によりて、貴き、力ある吾人の生命を造り上げねはならぬのである

二、靈と肉 吾人が有する兩個の靈と肉とは同時にその欲求を満さんとするの結果、そこに快樂と苦痛とを伴ふのである。吾人が向上性は卑俗なものは捨てゝも高尚なものを取らうとする、併し吾人の感情は比較的卑俗なものに於てより多くの快樂を覺えるのである。斯くて一面に歡迎する處は多方に於ける排斥となつて、敬虔ある思想生活と、さうでもない實生活との矛盾は起り、同時にそれが苦痛といふに到達するのである。故に吾人は靈と肉との調和を圖らねばならぬ。若も此のまゝに過ぎん歟、兩者の葛藤は遂に自然性に迎合され易い肉的欲望が勝利を得て、いつかは純潔ある思想信仰をも内酔せしめ、最後にはそれが全生活の破壊ともある懼がある。故に吾人は兩者の調和に於てその根底より何者をも最も崇高ある靈的光

揚に浴せしめたいと思ふのである。

三、高調ある精神的生活 『業平も飲食つてから杜若』吾人が肉體を有する以上は、全然物質的欲望を離す事は能きまい。随つて奈何に高尚な宗教や藝術の世界に遊ぶ人でも、遁るゝ事のならぬは實社會の風波である。けれどもその内生活を最も高調に把持するの結果、悠々として自家の天地に生さる事が出來やう。彼の繞はる稚兒に銀猫を與へて去つた西行、食は無くとも東山の麓に繪筆を舐めた大雅堂、それ等の人の垢づいた衣の裏に何の悲慘なる實社會の影が秘まうか。之等の如く何の物質的欲望も社會的執着も無かつたならば、慥かに現世安穩である。この境地に至るには、唯徒らに奇矯を學ぶの徒の到達しうる處ではまい。深く人生を識り、宇宙を解するもので無ければ到底及ばぬ處である。現代の複雑なる社會生活に在るものは、能く現代を識ると俱に、足元の明るい實社會に自家の立脚地を發して、そして最も根柢あり統一を有する思想より、完全なる理想を定め

て、之に向つて自己の全生活を傾注して見たならば、聽てはこの現實を以て理想化する事が出來やう。その思想の表現的生活に於て、動もすれば陷り易い奇矯偏屈に流るゝ事なく、最も高調に、最も熾烈に持續する精神生活は、すべての物質的のものをも美化し藝術化して、其處に渾然たる統一的生活が得られるのである。『御宮仕をば法華經と思召せ。』と教へたまひしもこゝである。風雪身を切る御庵室の中『雪を盛て飯を觀ず。』このたまひし境地も之れである。

四、宗教的生活 何人も如上の境域に入る事の能さるのは、獨り宗教の法悅的生活である。日常の怎麼些事にも一々本佛應用の慈悲を認めて、念々感謝的法悅に潤ふたならば、是れ全く統一ある生活である。吾人は事具の佛である。この觀智と信仰とに於て何の嫌惡すべき社會があり、何の悲しむべき所作があらうか？

斯くて初に疑つた肉的物質的欲望も、或は却て意義ある高尚なるものとなつて征服せられ、こ

ゝに所謂内外生活の統一は得られるのである。吾人は本化の宗教的生活によりて、偉大ある力と悦樂とを得て、恣に靈的欲望を満足させなければならぬ。

かたる花

猪 口 海 靜

古今東西老若男女、花に對するの愛情に別あらず。兒女は幼き手に弄するを好み、英雄を以て世界の花と云ひ、敗殘の死者も花を以て祭らる。所有物を目して之れを美と感せば、花の形容を以て迎へざるなし。然り、夫れ花は、美の標本あらばなり。舌薔に目に見て、其の美を感ずるのみにあらず。花は實に宗教道德の好教訓として、古來聖者の示せるもの少なからず。其の詩歌にいそしむ人、之れを以て好詠題とあすは人よく之れを知る。若し人生に花なからしめば、世は如何に寂寥に、沒趣味に果てん。いふ世の文學美術は、亦其

の美の大部を失するに至らん。人生の花に於ける、如是親密の關係あり。

古來美人の異名として、解語の花といふ。蓋し花に固有の愛嬌ありて、人の真情を傳ふる處に、言語の用をなすありて、無量の感を溢るゝものなくんばあらず。『往時渺茫誰と共に語らん、閑庭唯不言の花あり。』とは、敦光の詩言あり。然れども、之れ不言の花は、不言の言を爲すに非ずや。閑庭、豈に昔を語らざらんや。彼の少女は、太田道灌をして、『山吹の實の一つだに無き』を言はしめしにあらずや。野末の徒花狂花に至るも、人の能く言ひ得ざる言葉を、良く傳ふる力あり。解語の花、豈美のみならんや。梅花の雪を犯して咲くは、古來堅忍不拔の氣象にたとへ、又婦人の貞操に比し、櫻の潔く散るは、武士の身命を惜しまざるに比せらる。本居の『しきしまの大和心』と歌はれしも、そを代表せるものあらん。『上を思へば限りおしと下を見て咲く百合の花』の俗謠も、誰かその謙讓の徳を思はざらん。又花は諸行無常